

新新聞

平成18年4月 第三号
 ~発行~ 福生市立中央図書館

Wobbly, do? (ワウビィ、ドゥ?)
 新一年生(中学・高校ともに!)の皆さん、
 一緒に新聞作ってませんか?
 詳しくは 中央図書館TEL553-3111まで。

春になりましたね...心躍る季節に三号を発行することになりました。新しいコーナーも加え、前号よりさらにパワーアップしてまいります!まずは、中学生たちがオススメ本の紹介から...ドウゾ! (中央図書館YA担当)

都会のトム&ソーヤ
 はやみねかおる 著
 講談社

主人公の内藤内人は雑学豊富な中学二年生。ある日内人は同級生で大金持ちの息子の童王創也と知り合い、それからというものの創也の関わる事件に巻き込まれてしまう。そんな童王創也の将来の夢、それは「究極のゲーム」を作る。そしてそのために謎のゲームクリエイターである人物、栗井栄太を見つけたことだった。分厚いけれど、どんどん読める楽しい本です。どうぞ読んでみてください。

三月現在、①②③巻まで発行されています。市内では、中央・わかたけ武蔵野台で所蔵しています。



僕と彼女と彼女の生きる道
 黒部 啓子 作
 角川文庫

この本は、テレビドラマのノベライズ本です。ある日エリート銀行員小柳徹郎(童王剛)は、いつも通り妻加奈子(りょう)の入れ通り妻加奈子(りょう)の口から「離婚してよ」といふ言葉を聞かされた。妻の口から「離婚してよ」といふ言葉を聞かされた。妻の口から「離婚してよ」といふ言葉を聞かされた。

家に帰ると、真つ暗な部屋...まさかと思いきろセツトなどを開けた。絶句する徹郎...。するとトイレから水を流す音が...「加奈子! いるのか?」しかし出てきたのは、娘の、小柳凛(美山加恋)だった。父と子と凛の家庭教師のゆら(小雪)の感動のストーリー。ぜひ、読んでみてください。

生協の白石さん
 白石昌則/東京農工大学の学生の皆さん 著
 講談社

この本は、白石さんという人が、様々な人の生協への質問、意見、要望などに答えていく本です。どの質問も笑ってしまいう程に面白くて、また、白石さんの答え方もとてもユニークで楽しいです。どれほど面白いかは、皆さん読んでからのお楽しみですね。読む人それぞれに感じ方がちがうのでしょうが、わたしはおすすめします。

市内全館で所蔵しています。



初恋草の咲く頃に
 沖原朋美 作
 集英社

この本は、両親の離婚により母の生まれ故郷にほど近い町に転校してきた七瀬と、たまたま入った資料館で展示されていた一枚の絵の前で会った青世の話です。町にも家族にもどこか違和感をぬぐえずにいる七瀬、弱弱と、学校を休みがちな青世、いつしか、二人の心は微妙に寄り添っていくが...。終盤にある青世から七瀬への十五ペーシ以上の手紙は、感動的です。中央館で所蔵しています。



満員電車
 高橋 由希

午前七時〇三分、僕がいつも乗る電車の時刻。そして母さんが死んだ時刻。 「間もなく下り電車が参ります。黄色い線までお下がります。入學式当日、通勤ラッシュとかなさなり、駅には何人も入る。僕は走る。そんな入口の近くで立つ。そして彼女はまたまた走り込んで僕の横に動き出した。彼女は僕と同じ制服を着ていた。髪は長く、背中まできていた。僕より二〇cmくらい低い背丈で二五〇から一六〇cmくらいだ。とても整った顔だった。「おはよう。彼女がいきなり話しかけてきた。僕は動揺してしまっただけだった。そんな行動をとってしまった僕に、「今日から同じ高校だね。よろしく。」と、明るく笑顔で話してきた。僕はうなずいた。駅に着き彼女は思い出したように、「あー!友達と待ち合わせしてたんだ!」そう言って彼女が走り去ろうとしたら「名前!」彼女が叫んだ。教えて、君の名前!「英、日向、菜」。彼女は微笑んで「私は桜坂美華!」と二階のクラスだと思ふよ!」それだけ言っ走り去った。

学校に着き、入學式を終えていよいよクラス発表のとき。廊下にはりだされた五枚の大きな紙。自分の名前を探し、見つけた。「C」その少し上の方に彼女の名前もあった。「桜坂美華」「ねっ!言った通りでしょ?」不思議だった。「なぜ二階のクラスだ?」彼女は「Eミツ」と言い残し、手を差し伸べた。「ア!」「握手手!僕はとまどった。嫌だったかな?少しひいた?」彼女の顔が一転して曇った。あわてた。急いで彼女の手を握った。「ごめん、よろしく!」僕の目は開いてたかもしれない。そんなことより、彼女が笑っていないのがこわかった。彼女は再び微笑んでくれた。彼女は振り返った。「美華!」教室に入るよ!向うのほうから話し掛けてくる友達「わかった!」彼女の返事だった。

「えっ?」
 前々から、そろそろ真子にも、話をしたいと思っていたのだ。
 「えっ?」
 少し驚いたみたいだったが「あんたが言いたいのなら、いいよ!」
 横目で私を眺めると、笑いがこぼれ落ちてきた。
 (次号に続く)

垂佐美
 桜が満開になった。空を見上げると、雲ひとつない青空が広がっている。
 青空なんて珍しい事ではないはずなのに、私はしばらく立ち止まってそれを眺めていた。
 なんとすくだが、毎日のように通る道なのに、今日は何かが違う気がしたのだ。
 「もう、満開って事は、帰る頃には散ってるかな...」
 四月の、少し涼しい朝。
 私は桜に別れを告げ、また歩き出した。そして、この風景が綺麗だと思えるようになったのは、きっと垂佐美のおかげだと確信した。
 (次号に続く)

今回初めてこの新聞を見て、とても偉いと思いました。4コママンガがあったり、図書館の人のインタビューがあったり内容がおもしろかったです。次回も内容のつまった新聞を作ってください!

